

**MERLEAU
-PONTY
CIRCLE**

メルロ＝ポンティ・サークル第23回大会プログラム

日時: 2017年9月3日(日)10:00-17:30

場所: 成城大学

【個人発表】

10:00-10:45

司会 加國尚志

渡辺亮(名古屋大学)

メルロ＝ポンティ「上と下という方向性」

10:45-11:30

司会 本郷均

猪股無限(筑波大学)

メルロ＝ポンティにおける「表現性」の問題について

— 1952-1953年講義「感覚的世界と表現の世界」を中心として —

【昼食】

11:30-13:00

【講演】

13:00-14:00

村瀬鋼

我々は身体であるという事実のみによって我々が我々の身体について持つこの特異な知(仮題)

司会 廣瀬浩司

【ビジネス・ミーティング】

14:10-14:30

報告・審議 本郷均

シンポジウム

メルロ＝ポンティと初期現象学

オーガナイザー：國領佳樹

テキスト内在的な分析だけではなく、その着想源との綿密な突き合わせを行うことは、哲学史研究の基本的な作業の一つである。実際、これまでのメルロ＝ポンティ研究の多くが、この作業を忠実にやってきたように思われる。しかし、この種の先行研究のなかでも、一部の初期現象学者の仕事はその重要性に比べてほとんど取り扱われてこなかった。

こうした状況ができあがってしまった要因はさまざま考えられる。その一つはそもそも初期現象学というカテゴリーに属する哲学者たちの個別研究には量的な偏りがあり、一部を除いてそれほど充実していなかった、というものである。

「初期現象学」とは、主に1900年から1939年までにフッサールに直接的ないし間接的に影響を受けたヨーロッパの哲学者・心理学者たちの現象学的な思想傾向を指す。残念ながら、この時期に活躍した多くの現象学者たちの仕事は現在ではあまりよく知られていない。実際、歴史的なパースペクティブから現象学を一つの運動として捉えたスピーゲルバークの網羅的な仕事はあるが、これは例外的なものであった。

しかし近年になって、この状況は変わりつつある。とわい、NASEP (The North American Society for Early Phenomenology) の創立に伴い、初期現象学者たちのテキストの電子化、それらの仕事に関連するまとまった論文・書籍の発表が続き、多くの国際カンファレンスも開かれるようになってきている。

本シンポジウムの狙いは、こうした世界的な研究の流れに乗じて、メルロ＝ポンティ研究における欠落部分を埋めるという名目のもと、地道な哲学史的研究の機運を高めることにある。今回は、主著『知覚の現象学』において重要な影響がみとれる、マックス・シェーラー、コンラート＝マルチウスの仕事にそれぞれ精通する研究者を招くと同時に、この二人の实在論的現象学の重要性を理解するために、アーロン・グールヴィッチについての考察も議論の呼び水として提示する。

14:40-15:10 植村玄輝(岡山大学)

現象的なものとリアルなもの：初期現象学とメルロ＝ポンティ

対象の感性的・感覚的な与えられ方を主題にしたヘートヴィヒ・コンラート＝マルチウスの「リアルな外的世界の存在論と現出論について」(1916年)は、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』においてまさに同様の問題を扱う文脈で言及する文献のひとつでもある。すると自然にでてくる疑問は、両者の立場にはどのような関係があるのかというもののだが、これに答えるのは容易ではない。その理由のひとつは、コンラート＝マルチウスの現象学的分析がいささか比喩的にすぎる点にあるといていいだろう。しかしこうした困難は、彼女の論考をそれが属していた当時の文脈に置き直すことで、いくらか解消することができる。このことの一部を示すのが本提題の主要な目的である。具体的には、「心的現実／現象的なもの」と「物質的現実／リアルなもの」の区別と、前者のある種の空間性というアレクサンダー・フエンダーの見解を背景として導入することで、コンラート＝マルチウスの分析の再構成を目指す。そのうえで、コンラート＝マルチウスとメルロ＝ポンティの関係についても、ごく簡単な所見を述べたい。

15:10-15:40

横山陸(一橋大学)

シェーラーにおける他者知覚と一体感情の問題

「共感の本質と諸形式」(1913/23年)においてシェーラーが展開した他者知覚論は、近年シヨン・ギャラガーやダン・ザハヴィによって「心の哲学」の文脈から再評価を受けている。ギャラガーやザハヴィが目するものは、他者の心の直接的な知覚を認めない現代のシミュレーション説や理論説(Theory-Theory)とはちがって、シェーラーは他者の心が表情や仕草として身体に直接表現され知覚されると主張する点である。だが、シェーラーの他者知覚論には、他者の心の直接知覚のテーゼと並んで、もうひとつ重要なテーゼがある。それは、自他無差別な体験の流れとしての内部知覚が存在するというテーゼである。メルロ＝ポンティは、たとえば、「幼児の対人関係」において、この自他無差別な体験流のテーゼを明確に受容してうえで、みずからの間身体＝主観性理論を展開している。

「共感の本質と諸形式」第二版において、シェーラー自身はこのテーゼを発展させて、共感のひとつの形式である「一体感情(Einsfühlung)」という概念を導入している。「Einsfühlung」(一体感情)という語は、「Einfühlung」(感情移入)からの造語であり、後者の接頭語 Ein が「～の中へ」という意味であるのに対して、前者の Eins は「ひとつ」という意味合いをもつが、この概念形成の事情は少し込み入っている。そもそも、シェーラーは1911年の「自己認識の偶像」および1913年の「共感と本質の諸形式」第一版において、テオドール・リップスの感情移入論に対して、みずからの他者知覚論を展開している。このシェーラーの他者知覚論に触発されて、エディット・シュタインは1916年に博士論文「感情移入の問題」を発表し、このなかで、感情移入とは異なる、いわば自他の感情が統合された「我々の感情」ともいべき感情の形式として「一体感情」を導入し分析している。このシュタインに回答して、1923年、シェーラーは大幅に書き加えられた「共感と本質の諸形式」第二版において、みずからの「一体感情」概念を構想している。しかし、シェーラーが「一体感情」と呼ぶものは、シュタインのそれとはちがって、自他の感情が統合したというよりも、融解した感情である。

こうした自他が融解した感情としての「一体感情」が、シェーラーの他者知覚論における自他無差別な体験流のテーゼから展開されたことは間違いない。だが「一体感情」と自他無差別な体験流のテーゼとのちがいは、どこにあるのだろうか。本発表は、その点を彼の「生命的なもの(das Vitales)」というカテゴリーに求めたい。そもそも1910年代のシェーラーは、他者の心が直接表現され知覚される「象徴」としての身体を強調する反面、カトリシズムの影響を強く受けて、「精神的なもの」の優位を強調する傾向があった。ところが、「共感の本質と諸形式」第二版が出版された1923年を境にして、シェーラーは、「精神的なもの」と「生命的なもの」の二元性を強調するようになる。精神と生命との二元論というモチーフは、最終的には、晩年の「宇宙における人間の地位」(1927年)において一種の形而上学として展開されるが、後生の評価は芳しくない。この際に興味深いのは、メルロ＝ポンティは、こうしたシェーラーの「生命」概念を生命の形而上学としてではなく、むしろ精神病理学の次元において、人間実在の根拠感情として積極的に展開しようとしたのではないかと思える点である。もちろん、メルロ＝ポンティの文章は示唆的なものにとどまる。だが、本発表は、シェーラーの他者知覚論から「一体感情」概念への展開過程を整理しながら、メルロ＝ポンティのパースペクティブから、「一体感情」を根拠感情として解釈することを企てたい。

15:40-16:10 國領佳樹(立教大学)

「知覚の現象学」と实在論:メルロ=ポンティとA・ゲールヴィッチの隔たい

よく知られているとおり、A・ゲールヴィッチは、フランスへの現象学移入に大きな役割を果たした人物のひとりである。とりわけ、メルロ=ポンティにとって、フッサール現象学とゲシュタルト心理学を連動させる彼独自の仕事はきわめて重要なものであったと推察される。実際、「行動の構造」「知覚の現象学」で参照されるゲシュタルト心理学やその周辺科学者の研究成果は、すでにゲールヴィッチが言及していたものばかりである。また、パリ亡命中のゲールヴィッチの講義にメルロ=ポンティが聴講していたことはわかっている。そのうえ、フランス語で発表された論文「ゲシュタルト心理学の見地とその展開」(1936)では、メルロ=ポンティがフランス語の校正をしていたといわれている。つまり、ゲールヴィッチの一連の仕事は、メルロ=ポンティも十分に知っており、しかも彼にとって自分の仕事にまさに直結する先行研究でもあったのである。

しかしそれにもかかわらず、メルロ=ポンティはその著作のなかでゲールヴィッチに言及することはほとんどない。この不可解な点については、ゲールヴィッチ自身もA・シュッツに宛てた私信のなかで複雑な心境を吐露している。なぜこのような事態が生じたのかは、さまざまな側面から考察できるかもしれない。たとえば、政治的ないし制度的な理由があったかもしれないし、きわめて個人的な理由があったのかもしれない。とはいえ、そのどれもが憶測の域を越えてないだろう。

そこで本発表では、純粋に哲学的な側面から、この二人の隔たいを見積もることにしたい。そのために私が注目するのは、实在論的現象学、すなわちミュンヘン学派に分類されるマックス・シェラー、コンラート=マルチウスに言及するメルロ=ポンティの議論である。私の考えでは、メルロ=ポンティのこの实在論的現象学への接近こそが、ゲールヴィッチと彼を隔てる決定的な哲学上のポイントである。本発表はこのような仕方であらゆる差異を確認しつつ、「知覚の現象学」の試みをもつ实在論的な側面を浮き彫りにしたい。

16:20-17:30 全体討論

18:00 懇親会